

H30 海外臨床実習

番号	氏名	渡航先	国・地域	渡航先での受入期間
1	A. T	サラワク大学	マレーシア	H31/2/11-H31/3/1
2	S. M	サラワク大学	マレーシア	H31/2/11-H31/3/1
3	O. T	サラワク大学	マレーシア	H31/2/11-H31/3/8

平成30年度岸本国際交流奨学金による海外活動実施報告書

渡航先 サラワク大学(マレーシア)

医学部医学科 5年

氏名 : A. T

[実習の目的]

第一の目的はマレーシア、あるいはサラワク州の医療制度について学ぶことである。私はもともと発展途上国の医療に興味があり、タイの大学に学生間交流で訪ね、医療制度を学んだ経験がある。マレーシアも同じ熱帯地域であるが、ボルネオ島という比較的大きな島の中に、マレーシア、インドネシア、ブルネイの3カ国が存在し、中でもマレーシアはマレー系、中国系、インド系、少数民族により構成された多民族国家という特殊性がある。そのため、医療制度や公衆衛生も私の学んだタイとも大きく異なっているのではないかと考え、特に今回は本土ではないボルネオ島での実習であるので、マレーシアの地域に根ざした公衆衛生、医療制度を学びたいと思っていた。

もう一つの目的は、感染症について学ぶことである。日本で「感染症学」として感染症について学ぶ機会があったが、特にマラリアや狂犬病に関しては日本における実際の臨床実習では見るのは非常に稀である。しかし、医師としてこれらの感染症について知っておくことは大切であると考えている。

[実習の概要]

最初の2週間はシブでの実習で、現地の3年生(日本でいう4年生)と一緒に講義を受けることが実習の中心であった。ちょうど3年生のシブでのカリキュラムの開始と重なったため、フィールド・ワークに向けた準備期間であったため、あまり野外での実習はなかった。

後半の1週間はサラワク州の州都であり、Sarawak 大学医学部のキャンパスのあるクチンの Sarawak General Hospital で5年生(最終学年)と共に、非常に実践的な臨床実習を行った。

日付	実習内容
2月11日(月)	講義 “Introduction to Hospital Sibü” “Roles and responses in infection control” “Safe surgery saves life”
2月12日(火)	講義 “Introduction to medical research”
2月13日(水)	統計学に関する講義 リサーチのテーマを決める講義
2月14日(木)	Long house 訪問
2月15日(金)	講義 “Health care delivery system in Malaysia” “The health

	program”
2月18日(月)	講義 “Community health of behavior” “Dealing with local communities”
2月19日(火)	Lau King Howe Museum 訪問 講義 “Primary health care” Sibu divisional health office 訪問
2月20日(水)	講義 “Medication compliance” Klinik Kesihatan Jalan Lanang(クリニック)訪問
2月21日(木)	講義 “Leadership and team formation”
2月22日(金)	Sibu Hospital 訪問、手術見学
2月25日(月)	呼吸器の Bed Side Teaching(BST) Dog Bite Clinic の見学
2月26日(火)	内分泌内科の外来見学 内分泌内科・腎臓内科の BST
2月27日(水)	BST リウマチ科の外来見学
2月28日(木)	BST
3月1日(金)	BST

[実習の内容・成果]

マレーシアの医療制度

マレーシアには国民のための健康保険は存在せず、**Two Tier System** という医療制度を持っている。これはマレーシアの医療の根幹を形作るものであり、ポケットペイから出資される **private sector** と政府から完全に援助を得ている **public sector** の2つから構成される。**Public sector** の場合、外来はマレーシアの国民は1回1RMである。血液内科やアレルギー内科など的高額な薬は **clinic** ではなく **hospital** で処方されるが、それも含めて1RMである。ただ、これらを処方する場合は専門家に必ずコンサルトして意見をもらった上で処方する必要があるという。どこのレベルの人の意見まで必要か、それに応じて薬もランク付けされているようである。その分、**public sector** では検査や治療が制限されたり(我々の訪ねた **Klinik Kesihatan Jalan Lanang** では検査溶液が高いからという理由で HbA1c の計測はできないし、エイズ検査もできなかった)、**outpatients** カードを提出して検査して医師の診察と処方を受けて薬局で薬を処方されるまで非常に時間がかかったりする。**Private sector** も一般人が払えないほど高額であるというわけではなく、待つのが嫌だから、病室がきれいだからという理由で **private sector** を使う人も多いようである。タイとはまた少し異なり、それぞれの国特有の医療制度が構築されていて非常に興味深かった。

感染症

また、マレーシア独特の蚊の駆除の方法についても学んだ。Fogging はデング熱対策で、家の外から煙を吹きかけて家の中の蚊を駆除するもの、スプレーはマラリア対策で主に家の外の蚊を駆除するものである。残念ながら今回は実際やっているところを見学することはできなかった。

最も有意義だったのは Dog bite clinic 訪問である。このクリニックは、犬や猫に噛まれた人が、狂犬病に対する初期対応を行うために来院する外来専用のものである。サラワクでは一年半前に狂犬病が outbreak してきて、今までに 20 人を超える人が亡くなっているという。人だけではなく、犬にも一年ごとにワクチンを打たなければならない。かなりのハイリスクの傷を負っている人もいた。傷ごとに 3 つの重症度にカテゴリー分けし、今後の治療をしっかり吟味するために、かさぶたも一つ一つ剥がして診察を行っていた。

臨床実習(BST)

ここでは医療機器が日本よりも限られているために、検査も必要最低限で確実なものが求められるために(X 線でさえも本当に必要かどうかしっかり議論する)、かなり息のかかった身体診察の教育が行われていることに非常に驚いた。BST では学生が先生の前で制限時間内に身体所見をとって先生にその場で説明し、フィードバックを受け、さらにそこから発展させている様々な疾患と一緒に学んでしまうという方式の授業であった。鑑別診断も的確にすばやく漏れなく学生が挙げていて、しっかり勉強をしている印象であった。BST という名にふさわしいもので、日本では行われているのをあまり見たことがない。

外来見学もただの見学ではなく、先生が外来をしながら学生に矢継ぎ早に質問して学生が答える方式である。マレーシアの医学教育はすべて英語で行われており、学生たちはすべて英語で医学英語を理解していた。私も事前に医学英語をある程度勉強していったのだが、彼らには刃が立たずに、非常に悔しい思いをした。

マレーシアでは様々な言語を話す人がいるので、それらに対応する必要がある。学生の大半がマレー語(あるいはサラワクの方言)、英語、母国語と三ヶ国語を話すことができた。実際見学したときも、医師や学生たちは患者ごとにマレー語、英語、中国語を使い分けていた。

[今後の抱負]

今回、たくさんの現地の 3~5 年生が積極的に我々の受け入れに関わってくれた。彼らと関わりを持つ中で、我々がマレーシアのことを訊ねる以上に日本のことを我々から聞き出そうとしてくるのを感じた。特にマレーシアは多民族国家であり、我々日本人からすると考えにくいその状況の中でどうやりくりしているのか非常に興味があったと同時に、なかなか理解しにくい場面もあった。数週間が経過する中で、お互いの文化の見えないところが見えてくるようになり、異文化コミュニケーションの大切さを実感した。将来、私も外国人を診療し、また一緒に仕事をすると思うが、その際に相手の背後にあ

る文化を理解しようとするのを忘れずにいたいと思う。

また今回の実習で痛感したのは、英語はネイティブの発音だけ聞ければいいというだけではないということだ。マレーシアは英語の話者は多いが、母語が様々な言語であるため、訛りも人それぞれである。英語力の向上は非常に大切であり、これからはより一層力を入れていこうと思っているが、様々な訛りの英語にも対応できるようにしておきたいと思う。

最後に、今回このような素晴らしい海外実習を行うことができたのは、サラワク大学にて我々の受け入れを担当してくださった **Dr. Emily Hii Ing Ing**、医学科教育センターの和佐勝史先生、そして岸本奨学金を通じて多大なご支援を頂いた岸本忠三先生のご協力によるものです。心より御礼を申し上げます。ありがとうございました。

平成30年度岸本国際交流奨学金による海外活動実施報告書

医学部医学科 5年

氏名： S. M

目的

マレーシアという発展途上国での医学教育・医療システムの在り方を学び、日本と比較することでお互いに関する理解を深める。また、多文化・多民族が共生する社会でどのように医療が行われているのかを学ぶ。

実習内容

3週間の実習期間のうち最初の2週間はシブにて CMPH (Community Medicine & Public Health)実習を行い、最後の1週間は大学のあるクチンにて Internal Medicine 実習を行った。

2/11-2/22 シブ

	2月11日	2月12日	2月13日	2月14日	2月15日
午前	オリエンテー	講義	講義		講義
午後	ション		グループワー ク	ロングハウ ス訪問	講義
	2月18日	2月19日	2月20日	2月21日	2月22日
午前	講義	博物館見学 講義	講義	講義	外科見学
午後	ロングハウス 訪問	Sibu DHO 見学	KK Lanang 見学	グループワ ーク	

講義内容

- Health Care System in Malaysia
- The Health Program
- Community Health Behaviour
- Dealing with Local Communities
- Needs Assessment
- Primary Health Care
- Medical Compliance
- Introduction to Research
- Introduction to Statistics
- Research Ethics

シブには3年生の学生の一部が、CMPH 実習あるいは Sibu Hospital における外科実習のために滞在していた。

私たちの参加した2週間は9週間ある CMPH 実習の最初の2週間であり、実習内容も導入の要素が強かった。CMPH 実習では、少数民族であるイバン族の住むロングハウスを1つ選び、9週間の実習期間中にそのロングハウスにおける健康問題を1つ選んで実際に介入を行いその成果を分析するという活動を一つの軸としており、今回の2週間でもその準備のための講義やグループワークが多かった。

フィールドワークとしてはロングハウス、Sibu Hospital の歴史博物館、Sibu DHO (Divisional Health Office)、KK Lanang (クリニック)の訪問・見学を行った。また、半日外科実習生に混ざって Sibu Hospital にて手術見学をする機会もあった。

2/25-3/1 クチン

	2月25日	2月26日	2月27日	2月28日	3月1日
午前	Bed Side Teaching	外来見学 (内分泌)	Bed Side Teaching	Bed Side Teaching	Bed Side Teaching
午後	Dog Bite Clinic 見学	Bed Side Teaching	外来見学 (膠原病)		Inter-department Activity

クチンでは5年生の Internal Medicine 実習生と混ざって Sarawak General Hospital における内科実習に参加した。8人ほどの5つのグループが内科実習を行っており、臓器毎に分かれてはおらず、日毎に様々な科の専門医が実習を担当していた。病院実習は Bed Side Teaching が中心で、学生が一人ずつ症例発表を行ったり、実際の患者に身体診察を行ってみせてその所見を述べ、その後講師からのフィードバックや質問の時間があった。日本に比べ問診と身体診察が非常に重要視されている印象を受けた。

また、コーディネーターの先生のご厚意により現地の学生とは別に Dog Bite Clinic を見学する機会もあった。サラワク州はマレーシアの中でも狂犬病の発生が認められている地域であり、犬猫に噛まれた患者が遠方からも来院していた。受傷時の状況や傷の状態やなどからリスク分類を行い、どのような場合に狂犬病ワクチンや更には免疫グロブリンの投与を行うかを学んだ。

感想

今回の実習で最も印象に残ったのは、マレーシアの学生の積極性と実習において学生の主体性に任せられている部分の大きいことである。特に病院実習では学生が自分で病棟を歩き回って担当患者を見つけ、問診や身体診察を自由に行う様子が興味深かった。試験でも筆記試験の他に実際の患者を使った実技試験も必ずあるそうで驚いた。講義やグループワークも非常にフランクな雰囲気、積極的に発言し、学生たちで様々なことを決定して

いく様子がとても印象に残った。マレーシアの学生は、日本の学生よりも実際に患者と接する機会が非常に多く、先生や目上の人に対しても素直な人が多く、勉強に対する姿勢もとても熱心な印象を受けた。とはいえ、試験前に寝不足になるところや過去問が出回るところなどは日本と変わらず、学生はどここの国でも同じだと面白く思った。

また、マレーシアでは公立病院の患者負担が非常に少ないことにも驚いた。外来のみならば何をしても基本的に一律 1RM (約 26 円) だそう。現地の学生に聞くとマレーシア政府は予算のかなりを医療費に回しているそうである。しかし、私たちの訪問したクリニックでは試薬が高価であるため HbA1c の検査ができず、血糖測定のみで糖尿病患者の管理をしていたり、狂犬病ワクチンも標準よりも少量を投与し出来るだけ多くの患者に回るようにしたりと、経済的に厳しい様子も垣間見ることもできた。それ以上の医療を求めるならば高額ではあるが私立病院に行く必要があるそうである。公立病院では誰でも少額で最低限の治療を受けることができるシステムに感心するとともに、日本の環境が恵まれていることも実感した。設備が限られているせいか学生実習でも問診と身体診察のトレーニングに非常に力を入れている点も印象的だった。

更に、サラワク州はマレーシアの中でも疫学が特殊であるらしく、デング熱やマラリア、狂犬病などが身近にみられることも印象に残った。感染症の授業でも聞いたことのないような感染症もいくつか耳にし、異国に来たことを実感した。一方で肥満や糖尿病、高血圧、がんといった日本と同じような問題も抱えていた。

また、今回の実習を通し、マレーシアの多文化共生社会の在り方を体感することができたのも非常に良い経験だった。イバン族の住むロングハウスを訪問した時、イバン族の多くはキリスト教徒なのだが、イスラム教徒の学生たちがお祈りの時間になると当たり前のようにそのための場所を提供してくれたことがあった。他にも例はたくさんあるが、特に印象に残ったエピソードである。様々な文化・民族・宗教が共存している中に仲間の一人として迎え入れてくれて、いつも笑顔で親切に助けてくれ、渡航前は女子は 1 人で不安だったが滞在中は一度も困ることがなかった。彼らとかけがえのない友情を築くことができたことはなによりも得難い経験だった。

今後の抱負

今回の実習を通して医学英語の知識不足と問診・身体診察の重要性を痛感したので、今後力を入れて勉強していきたいと思った。特に問診・身体診察に関してはどのようなところで働くにしても医師としての基本であると改めて感じたので、積極的に学んでいきたい。

また、医学と直接の関係はないかもしれないが、良いと思ったことは積極的に口に出して行動に移し、親切心をためらわずに実行する行動力は見習わなくてはと強く感じた。

謝辞

今回の実習を通して、教科書で学ぶことのできる医学の知識とともに、マレーシアで出会った学生や先生たちの医学そして人生に対する姿勢から非常に多くのものを学び、刺激を受けました。このような貴重な機会を与えてくださった岸本忠三大阪大学名誉教授及び関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

平成30年度岸本国際交流奨学金による海外活動実施報告書

医学部医学科 5年

氏名： O. T

【スケジュール】

日付	活動場所	活動内容
2019/2/11～2/13	セミナー室	Public Health に関する講義に参加
2019/2/14	長屋	Iban 族が住む長屋に訪問し健康に関する意識調査を行った。
2019/2/15	セミナー室	Public Health に関する講義に参加
2019/2/18	長屋	Iban 族が住む長屋に訪問し健康に関する意識調査を行った。
2019/2/19 午前	博物館	Lau King Howe Hospital Memorial Museum で、Sibu の医療の歴史について学んだ。
2019/2/19 午後	Sibu DHO	Sibu の健康部門で Sibu の公衆衛生について学んだ。
2019/2/20 午前	セミナー室	Public Health に関する講義に参加
2019/2/20 午後	クリニック	Sibu のクリニックの見学
2019/2/21	セミナー室	Public Health に関する講義に参加
2019/2/22	Sibu Hsp.	Sibu Hospital で外科の見学
2019/2/23	移動日	Sibu→Kuching へ移動
2019/2/25～2/26	SGH	Sarawak General Hospital で Bed side teaching に参加
2019/2/27	SHC	Sarawak Heart Center で外来見学と BST に参加
2019/2/28～3/1	SGH	Sarawak General Hospital で Bed side teaching に参加
2019/3/4～3/8	SGH	Sarawak General Hospital で Bed side teaching に参加

【目的】

Sibu

日本では珍しい感染症も多くある Sarawak 州郊外の Public Health について学ぶ。

Sibu 郊外の長屋に住む Iban 族の健康意識について調査する。

Kuching

Sarawak 州の首都である Kuching の病院で、現地の医学生に交じって臨床実習に参加する。

【成果】

Sibu

開始時期の都合で、例年の報告に比べるとクリニックの見学、長屋の調査などの課外活動に参加できる回数は少なく、講義への参加がメインであった。しかし、少ないながらも参加することができて良かった。

クリニックは、日本の一般的な診療所とはイメージが異なり、外来のみで入院は扱っていないものの、規模は市中病院レベルであった。さらに驚くべきは、マレーシアの国立診療所・国立病院の診察料金は、薬剤費も含めて RM1 (2019/03/12 現在で 27 円程度)であるということである。その分、診察待機時間が長かったり、一部検査項目については結果到着に長い時間がかかったり、CT・MRI については重症例や緊急例でしか利用できなかったりと、不便も多いため、そういった需要に対しては私立の診療所・病院が担っているとのことだった。長屋の調査について、現在 Iban 族も現代化してきており、想像していたような古風な長屋や伝統的な生活は変わりつつあった。長屋に住む半分の人々はマレー半島に出稼ぎに行っており、残った一部の人々が水田、ゴム、胡椒の栽培で生計を立てていた。現代化に伴い、教育レベルもあがり、医療へのアクセスも改善されてきているようだ。

Kuching

UNIMAS の学生の臨床実習は大きく分けて 3 つのプログラムから成り立っている。診察の見学、Bed side teaching、講義である。

診察の見学では、診察に時間がかかったとしても、診断について、追加の検査方針について、今後の治療方針についてなど、ほぼ全ての過程において、学生に先に意見を求めて進めていた。典型的な症例のみならず、診断や治療方針の決定が困難な非典型的な症例に対しても鑑別診断を次々と挙げていき、今後の治療方針に対して意見を述べている姿には感銘を受けた。

Bed side teaching では、指導医師が選んだ入院患者に対して、学生がまず身体所見をとり、重要な所見を述べ、鑑別疾患を挙げたり追加すべき検査を挙げたりしていた。CT, MRI が手軽に利用できる日本に対して、州に 2 個程度しかないとされる Sarawak 州では、身体所見が重要であり、ほとんどの学生が高いレベルで所見を得られていた。いくつかの特徴的な所見については、日本では経験する機会がまだ無かったが、こちらの病院で初めて経験することができ、極めてよい機会となった。当然、日本でも身体所見は今なお重要であるため、さらに種々の所見を得られるような経験を積んでいくつもりである。

【今後の抱負】

UNIMAS での **Bed side teaching** では、指導医師により一方通行の指導ではなく、学生の意見や発言も尊重した双方向の指導であった。これにより、UNIMAS 学生の臨床能力は大阪大学医学生と比べて遥に高いものであると感じた。

4月から始まる最終年度では、より積極的に参加し卒業前にある程度の臨床医学的能力を身につけていきたい。

また今回参加した海外実習は、医学専門用語について英語で学ぶよい機会でもあったため、これを忘れないように日本でも復習し、将来的に国外の医師や研究者と良好な関係を築くための足掛かりとしたい。

【謝辞】

岸本基金により快適な実習にしてくれた岸本先生、
海外実習全般のサポートをしてくれた医学科教育センターの和佐先生、河盛先生、西川さん、
受け入れ先で丁寧な指導をくださった UNIMAS の先生方、
Sarawak 州での生活をより良いものにした UNIMAS の医学生に感謝します。
ありがとうございました。